

濁水かわら版

第70号

2018年11月23日

日本の戦争 20 支那事変シリーズ

ボケ防止を兼ねて 中安 宏規

水と兵隊 10

揚子江の危険地帯第2話 筆の戦士6名散る

【図A】揚子江を行き来する日本の軍用船は、兵士の輸送だけでなく、従軍記者や慰問使も同乗していたようです。第2の危険地帯を無事通り抜けたと思った時、神頼みの輸送船は中国軍の不意打ちにあいました。

今回は戦場の記者の話を取り上げます。1931年9月18日に始まった満州事変から1945年8月の敗戦(注1)までの15年戦争の戦場で多くの記者らが散った。小子は、その犠牲者の全貌を把握していないが、手元の資料などを基に一端を記しました。

鶴見俊輔の“15年戦争”

①その前に「15年戦争」は、哲学者・評論家の鶴見俊輔氏(1922-2015年・ハーバード大哲学科卒)の造語で、同氏は次のように述べている。

「1963年、同志社大学にライシャワー米大使を招き討論会を開いた。その時、大使が日本の軍国主義をなすべき見まいとするの姿に異論を述べ、米国と日本の支配層の見方が一致していることを感じた。私の子供の頃、満州事変が始まった。上海事変が始まった。支那事変が始まった。

大東亜戦争(太平洋戦争)が始まったというように、ばらばらにニュースが伝わって来た。そのためバラバラの戦闘行為が起ったように受け取って来た。それが変だと思ふようになったのは敗戦後のことで、ひと続きのものとしてとらえる方が事実上(私の意識上の事実ではなく)あっているように思えた…15年戦争を始めて使ったのは『知識人の戦争責任』(中央公論1956年1月号)だった」(出典:鶴見俊輔著『戦時期の日本の精神史』岩波現代文庫)。

② 鶴見はまた「欧米では第1次大戦勃発(1914年)から第2次大戦までを30年戦争と呼んでいたが、昭和史のとらえ方では困ると考えた」と記す。第

【図A】

五人の記者達はさも啓蒙されたやうに頷いた。

か先刻も上甲板から三つ下の船艙へ逃げて居たよ。」

「皆氣をつけたがいよ、先刻敵から撃れた時、弾の水柱を寫眞に寫つそうとして、一生懸命になつて居た者があつたが、敵の砲は迫

撃砲ばかりだから一發命中したら大變だよ、第一線の報導任務でや

られたのなら本望だが、こんな處でやられちやつまらないよ。だか

ら迫撃砲の弾は出来るだけ船底の船艙へ避難して居たら大丈夫なん

だから、三時頃又撃たれるが、その時はそうしたがえよ。僕なん

が先刻も上甲板から三つ下の船艙へ逃げて居たよ。」

「慰問使」と云ふ腕章を附けた五十餘りの瘦形な男とが車座になつて何

にかしら話し合つて居るので、私は何氣なくその傍へ寄つて見た。二

十五、六の小柄な新聞記者がさも先華らしい顔付をして、

「皆氣をつけたがいよ、先刻敵から撃れた時、弾の水柱を寫眞に寫

つそうとして、一生懸命になつて居た者があつたが、敵の砲は迫

撃砲ばかりだから一發命中したら大變だよ、第一線の報導任務でや

られたのなら本望だが、こんな處でやられちやつまらないよ。だか

ら迫撃砲の弾は出来るだけ船底の船艙へ避難して居たら大丈夫なん

だから、三時頃又撃たれるが、その時はそうしたがえよ。僕なん

が先刻も上甲板から三つ下の船艙へ逃げて居たよ。」



水と兵隊

中庵 尙位
白井 秀風 靈

一〇、船内で散る筆の戦士

此の軍用船に新聞記者が六人乗つて居たが、その中のたゞ一人がマ
リヤにかゝり南京に下り、治くつたので再び前線に出て居る戦場
の経験者だけで、他の五人は内地と臺灣から派遣された戦場には新米
の記者ばかりであつた。だから午前中の敵の砲撃を特報にでもしやう
と思つたのが、右往左往と活動して居るやうであつた。

私が晝食を済ませて上甲板に出て見ると、この新聞記者達が六名と、

「慰問使」と云ふ腕章を附けた五十餘りの瘦形な男とが車座になつて何

にかしら話し合つて居るので、私は何氣なくその傍へ寄つて見た。二

十五、六の小柄な新聞記者がさも先華らしい顔付をして、

「皆氣をつけたがいよ、先刻敵から撃れた時、弾の水柱を寫眞に寫

つそうとして、一生懸命になつて居た者があつたが、敵の砲は迫

撃砲ばかりだから一發命中したら大變だよ、第一線の報導任務でや

られたのなら本望だが、こんな處でやられちやつまらないよ。だか

ら迫撃砲の弾は出来るだけ船底の船艙へ避難して居たら大丈夫なん

だから、三時頃又撃たれるが、その時はそうしたがえよ。僕なん

が先刻も上甲板から三つ下の船艙へ逃げて居たよ。」

時を少し過ぎて居た。
木の無い赤黒い大きな山が行く手に見える。その山の麓は富士の裾
野を大きくした様に流れて居る。陣地には格向の地形の様だ。敵が居



計を見たら十四
計は無意識に腕時
から言つた。私
すよ、と笑ひな
險區域に入りま
を見たら、一時
居た。船長は私
を見る、一時
間もしたら又危
計を見たら十四

慰問使らしい男も感心したやうに盛に頷いて居た。先輩氣取りの新
聞記者はさも得意らしく小さい胸を張つて、腕時計を見ながら、もう
一時間したら又危険區域へ入るよ、と云ひ乍ら、すた／＼と向の方へ
歩き出した。外
の新聞記者達も
思ひ／＼に歩き
出した。

1 次大戦に地球の反対側で参戦した日本は、戦争景
氣に湧き大正デモクラシーへ。それが一転、関東大震
災→震災恐慌→米国の排日移民法成立…で、戦争
へ走った。欧米との違いは、鶴見の指摘通りと考える。
同大使は64年、毎日新聞のベトナム戦争特派員報
国「泥と炎のインドシナ」の休載を迫ったことがある。

注1)敗戦の日の考え方 ①8月14日御前会議でポツ
ダム宣言受諾の第2回聖断後の「終戦の詔勅^{しやうちよくかんぼつ}発
(注:第1回聖断は10日。天皇の地位変更なしの条件で
受諾を米英に伝え、その回答の解釈でゆれ遅れた)。②
15日正午の終戦詔書の玉音放送。③9月2日、東京湾の
ミズリー艦上で重光外相らが降伏文書に調印の3ツ。

新聞は戦争で部数を伸ばし 社員は斃れた

表B 1920年代～1930年代の東京周辺の新聞発行部数(万部)&ラジオ普及台数(台)

1923 年 8 月部数 関東対震災直前		報知 34 国民 30 時事 30 朝日 24-25 東日 24-25 万朝報 10 読売 10			
1931 年部数 満州事変勃発		輪転機数	飛行機	ラジオの普及と放送	試験放送開始 25/3/1、本放送 7/12 前に約 5500 台の普及。31 年 100 万台を突破。定時 NEWS 4 回→6 回、同年 9 月の臨時 NEWS 17 回放送。
大阪朝日・東京朝日	200 万	29 台	15 機	1924 年度 5455 台	
大阪毎日・東京日日	200 万	35 台	13 機	1931 年度 105 万 5778 台	

明暗分けた関東大震災

③ 表Bは、①関東大震災(1923/9/1日)直前と満州事変勃発(1931年)の東京近辺の新聞発行部数。②関東大震災の2年後に始まったラジオの普及台数。池田一之著『記者たちの満州事変』(人間の科学社 2000年)を基に作成した。朝日・東日は社史と若干違う。

④ 池田氏(1928-98年・明治大学卒)の青春は前記の鶴見氏同様、戦争の時代であった。毎日新聞学芸部編集委員を務め、母校のジャーナリズム史教授に就任。満州事変のきっかけとなった柳条湖を再三訪れ、現地の人々から聞き取り調査を行う実証派の記者だった。今回、薫陶を受けた池田先輩の著作からヒントを得、引用もした。

⑤ 関東大震災で東京の新聞社は大打撃を受けた。東京朝日は築3年の社屋が全焼、本社を帝国ホテルに移した。社屋が残ったのは東京日日と報知のみだった(朝日新聞の90年)。奇跡的に延焼を免れた東日は足踏み印刷機で午後2時ごろ号外を数百枚印刷し市内に張り出した(東日70年史)。

⑥ 新聞発行は西高東低だった。大朝が1888年、東京で印刷開始。逆に1905年、福沢諭吉創刊(1882年)の時事新報が大阪に進出した。遅れをとった大毎は東京で電報新聞を買収するも成果なし。そこへ1872年創刊の東日譲渡の話が三菱から飛び込んだ。

⑦ 日露戦争時の1904年、政治家の加藤高明(後の24代首相、妻は三菱財閥の岩崎弥太郎長女)が東日を買収するも08年、駐英大使に赴任。東日を引き受けた三菱は新聞発行が負担となり、「東京日日新聞」の題字を残す条件で大毎に声をかけ交渉が成立。東日は1911年3月、大毎東京支店となる。

るとしたらあの邊だらう、と思ひながら眼鏡で見たが何に一つ映らない。だが船、刻々として危険区域へ進んで居る。時計は刻々としてそれを知らせて居る。

あと二十分だ。私は私の部下の兵達の居る船艙へ行った。そして全員直ちに集合を命じた。そして午前時の時と同じ調子を與へた。然し午前中の敵の砲撃が一發も命中しなかつたので兵に氣持の餘裕を與へたものか、先刻の調子を與へた時見た。緊張そのものの様な顔を見ることが出来なかつた。

船長から危険区域に入つたことを知らせて來た。上甲板から一齊に兵の影が消えてしまつた。私は兵達の居る船艙を飛び出して再び舵機室へと走つた。堀の中佐はもう部下の大隊長と共に船長と何か話し合つて居た。上甲板を見たら新聞記者達は一人も出て居なかつた。船底の船艙へ逃げ込んだのであらう。然し不思議なことに一向撃つて來ない。その氣配さへ見えない。危険区域へ入つてからも四十分も経つた。時間になれば警戒解除をしていゝ時分だ。それに一發も撃つて來ない。私達は始めて通るのだが、船長はもう五六回も此處で撃たれて居るのだから地形を見誤る筈はないのだ。

逃げたんだらう、そうだらう。と云ふ誰かの聲が後の方から聞えるもう四十十分だ。飯にしやう。と云ふ暢氣なことを云ふ者さへ出て來た。一人去り二人去る。船長と堀の中佐と大隊長と私の四人きりになつた警戒警報を出してから一時間半も経つて居る。船長は私達を見ながら警戒解除にしますか!と云つた。杉の中佐は黙つた儘何も答へない。大隊長が杉の中佐に向つてもう少し。と云つた様であつた。

危険区域に入り警報を發して一發の弾も來ないと、何んだか安心してと云ふよりもつまらない氣がしてならないものだ。私も食堂へ歸つて行つた。堀○部隊の將校達は食事を採つて居る。カイゼル鑒の

老准尉が私を見ると、ドウですもう大丈夫だ飯々……一杯いこう、と盃を高く上げた。私はこの老准尉がとても好きで暇さへあれば談笑した。二人が飲んで交し、交しては飲み、それは夢中であつた。他の將校達はもう暮を打つて居る。將棋をさして居る。食堂内は暢然として、將校の誰かが敵も警戒も忘れてしまつて居るかのやうだ。

その時ドーンと云ふ音がした。食堂内は一瞬にしてシーンとなり碁石や駒や盃を手にした機嫌犬の様に耳を立てた。續いてドーンと聞えた、瞬間五つの丸い窓には二つ四つ六つの鋭い眼が外に向つて光つて居た。同時に夫々の部署に走つて行つた。敵は陣地を變えて居たのである。砲弾は船の前通路に集中して居る。三發四發と數えられた。午前中の敵と違つて上手に撃つて居る。私は此の分だと一發や三發は必ず命中するだらうと豫感した。私は船の前通路の方向に残された、一つの窓に老准尉の様子如何にと見て居た。五發目の砲撃が聞えると殆ど同時に恐ろしく大きな破壊の音と同時にバット黒煙が上り、三千電の船はノリノリと振動し黒煙の中から「やられた」と云ふ鋭い聲がした。遂に敵砲弾は命中したのである。一人の兵が顔一面鮮血に染つて食堂に駆け込んで來た。食堂は直ちに病室と變つた。

私は食堂を飛び出して部下の船艙へと走つた。その時第六發目は私の頭上を飛んで煙突に命中した。船艙の入口には目から上を出した漆谷老軍曹が、私を見るなり「隊長危ない」と叫んだ。私は漆谷軍曹に依つて部下に異状なきを知りや、直ちに舵機室に駆け上つた。そして漆谷軍曹と連絡を保ちながら警戒した。交戦ならん、撃たれること實に二十分間、敵の砲撃は止んだ。私は再び部下の船艙へ走つた。そして部下の衛生兵三名を堀○部隊の軍醫の許に急派した。午前中の敵と違つて敵ながらあつたばれと云ひたい、命中弾○發、(二二頁下段へ續く)

⑧ その頃、大阪で乱売合戦を続けていた大朝と大毎が1913(大正2)年、乱売防止協定を結んだ。部数増で経営が安定し乱売合戦の必要がなくなつたという。戦争取材で経費がかさむと、両社が同時に値上げした(前記池田著)。現在なら独占禁止法に触れるような事をしていただ。

⑨ 東日は1936年12月25日、「時事新報合同宣言」の社告を掲載した。震災の後遺症で体力を消耗した時事新報が、社長・主筆・主幹が慶応卒の東日に後事を託し、東日が受け入れた。

⑩ 満州事変勃発当時、22万部の読売は31年11月25日、夕刊発行を開始。翌32年33万8000部へ。前書きが長くなつたが、新聞は戦争で部数を伸ばしてきた。

(二頁より續く) 我死傷○名、然し第一發目の命中弾でやられた堀○部隊の兵が負傷した外、兵に一人の戦死もなかつた、犠牲の多くは船員と新聞記者であつたが船底へへくと非難した新聞記者達は氣の毒にも全滅してしまつた。

戦場の記者 特ダネを求め…

最初の戦死 大毎の茅野記者

① 図Cは、大毎社会部・茅野栄記者執筆の満州事変特派員としての最初のルポだ。茅野の写真つきで1931/11/28日の東日号外を飾った。装甲列車は5～6両編成の武装列車。極寒の地の戦争にソ連が考えたと言われ、山岳戦に使う山砲などを装備した。記事は装甲列車のデッキで茅野の隣にいた板倉大尉が炸裂弾の貫通で「やられました」のひと言を残し戦死した、と。

② 「白旗堡付近で苦戦」の見出しから奉天-錦州-山海関-天津-北京を結ぶ北寧鉄道の奉天に近い白旗堡駅付近(図E×印)と思われる。□で囲った「この号外は本紙に再録しません」の但し書きがある。大毎・大朝の大新聞はラジオ100万台普及の臨時ニュースに対抗する本紙2頁以上の号外を頻繁に発行した。戦地特派員は朝夕刊号外と、過酷な勤務を強いられた。

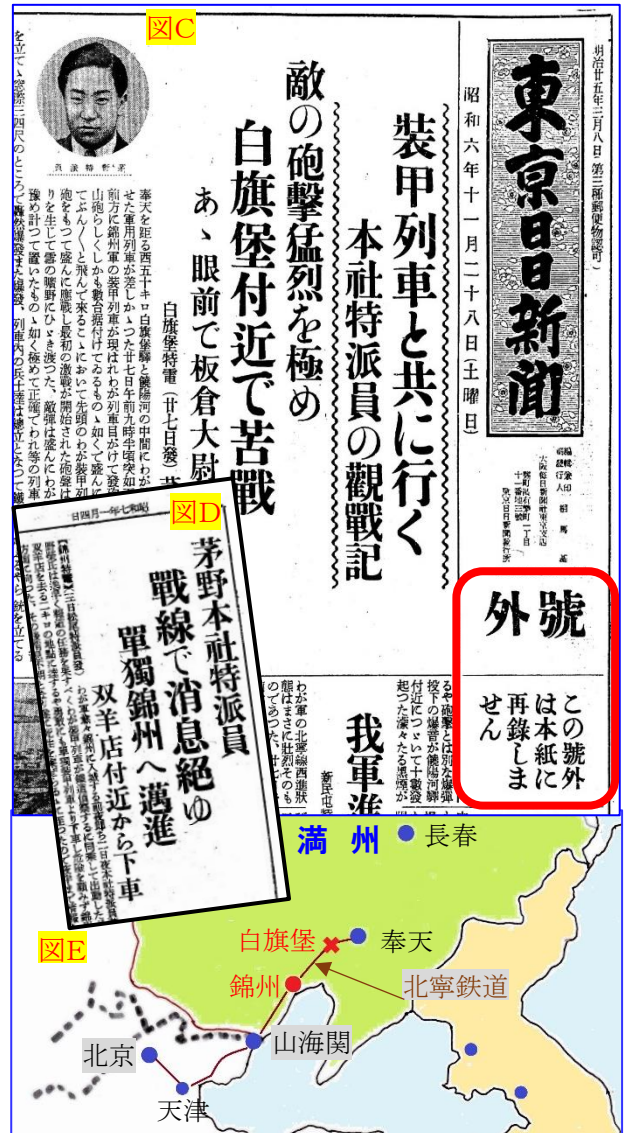
③ 図Dは、茅野が戦線で消息を絶ったと伝える32/1/4日の東日2面。彼は関東軍が錦州占領予定の1/3日の前夜＝2日夜、同僚記者に「俺は夜の内に錦州に入る」と、支那人案内人と暗闇の線路沿いに錦州へ向かった。さらに彼が匪賊に連行される目撃談を掲載。軍が捜索に協力も1/18日、電通至急報は「1/16日、錦西(錦州近郊)で茅野ら日本人4人の死体発見」と伝えた。

④ 茅野は1901年岡山県生まれ。東京商大(一ツ橋大)卒。26年、東日に入社し社会部・経済部。30年に休職し自費で10か月欧米を旅行→帰国後の同11月に大毎社会部へ→31/11/19日夕、満州特派員を命じられる。直ちに帰宅し春子夫人28歳、1人息子健3歳と、ろくに別れの言葉も交わさず旅装を整え社へ戻る。部長から、もう1人の同僚横田高明(後、上海支局で応召戦死)と共に「社会部員として敏速な報道と特ダネを書くよう求められた」。2人は22時20分大阪発の列車で戦地へ向かった。(「社会部記者:大毎社会部70年史」より抜粋)。行方不明の前日まで連日、書名記事が紙面を飾った。

大取材チームに埋もれる殉職者

⑤ 朝日新聞:31年、満州事変勃発と同時に本社からも記者・カメラ・連絡員の応援を飛行機などで送り込む。同年末、オートバイで原稿搬送中の運転者と連絡員が匪賊に殺害される。翌32年、満州国建国式典の写真や映画フィルムを運ぶ飛行機が荒天の山陰沖で墜落、操縦士と機関士が殉職。(注:殉職者名は省略、以下同)

⑥ 37年勃発の支那事変では記者22・カメラ9・航空員20の計51人を派遣。同年4人が戦死。支那事変3周年の39年4月の中国勤務142人を含め延べ537人に上る。殉職計7人。37年末の年表は▼11/25映画班員無錫で殉職。▼12/8特派員南京城外で殉職。▼12/17南京入城式、南京→福岡写真空輸3時間15分、写真空輸の新記録。▼12/28連絡員、済南飛行場で地雷に触れ殉職。(朝日新聞の90年より)。



⑦ 大毎・東日:1943年元旦、題号を「毎日新聞」に統一した。2002年刊の社史「毎日の3世紀」は、満州事変については茅野と成都事件(36/8/24日)で暴徒に追われた渡辺記者の殉職を伝える。東日70年史は錦州に「50余名の記者・写真班が満州を部隊に活躍した」とある。

⑧ 支那事変は、勃発当時の北京4名、天津3名(いずれも無電担当1名)が活躍。同時に映画班を含め大毎・東日から20名を派遣。8月、戦火が上海に広がる。上海支局員6名。応援は、主に華北は大毎、華中は東日が担当し上海に15名、南京に1名を送り込んだ。東日70年史は、戦線に送り込んだ人員は38年度上半期延べ269名、同下半期418名、39年度上半期570名、同下半期628名。殉職者7名、負傷者20余名。3年間に延べ1905名を戦地に送り込む。支那事変までの殉職は計10名。太平洋戦争では66名の殉職者を出した。毎日新聞は戦後7年かけ大取材チームに埋もれた殉職者を再現した。〈続く〉